ハートに薔薇色のときめき

Syoko & Ryosuke

風

fuu

EB

エタニティ文庫

目　次

ハートに薔薇色のときめき　5

満天の星の下で　255

ハートに薔薇色のときめき

1　危険な笑み　～祥子～

「本川君」

書類に目を落としていた本川祥子は、その声にドキンとし、顔を上げた。

声をかけてきたのは、祥子の直属の上司、石見亮介だ。彼の姿を目にし、祥子の胸がきゅんとする。

「はい」

祥子はいつものように無表情で答えた。まるでときめきなど感じていないように……

「滝野が夕食をと言うんだが……君、行けるかい？」

亮介の誘いに、嬉しさが膨らむ。祥子は即座に「もちろんです」とクールな口調で答えた。

「やったー」

亮介の隣にいる滝野錦司が、ぴょんと跳び上がりながら叫ぶ。

仕事に集中しすぎて気づいていなかったが、滝野は、退社後に三人でご飯を食べようと、亮介に言っていたようだ。

滝野は、祥子と同じく亮介の直属の部下。彼女より一年先輩だ。悪い人ではないのだが、お調子者でかなり騒がしい。彼は亮介に懐いているのだが、亮介のほうは騒がしい彼とふたりきりの食事など疲れてしまうのだろう、滝野に声をかけられたときは、いつも祥子を誘ってくれる。彼女が酒を飲めないというのも、誘ってもらえる理由のひとつ。亮介も滝野も酒を飲まない。滝野などは外見は酒豪のように見えるのに、体質的に受けつけないということで、一滴も飲めない。亮介は付き合い程度は飲めるようだが、酒が好きではないらしい。

亮介に特別な好意を寄せている祥子としては、こうして誘ってもらえることが嬉しくてならない。

滝野からは、仕事でしばしば迷惑をかけられるけれど、夕食のきっかけを作ってくれることだけに関しては、感謝したいくらいだった。

今夜、また亮介と一緒にご飯が食べられる。祥子は心を弾ませながら、残りの仕事に取りかかった。

「和食かぁ。俺、もっとパンチのきいたもんが食いたいんっすけど」

チョキの形の自分の手を見つめながら、滝野が不服そうに言う。何を食べるかでジャンケンをし、祥子が勝って、今夜は和食ということになったのだ。

「負けたんだ、素直に諦めろ。お前の好みに合わせてたら、毎回こってりしたものばっかりになる」

亮介に叱られて、滝野は拗ねたように唇を突き出す。大男のうえに、ごつい顔をした滝野のふくれっ面に笑いが込み上げそうになり、祥子は顎にぐっと力を入れた。

亮介の前で、絶対に笑うわけにはいかない。笑ってしまったら、彼に気味悪がられてしまう。そんなことになったら、彼女は生きていけなくなる。

祥子の笑顔は、ひどく薄気味悪いらしく、人様に嫌悪感を与えてしまうのだ。

『祥子ちゃんさ、笑うと顔が怖いよ。みんなも気味が悪いって言ってるし……だから笑わないほうがいいよ』

小学生のとき、仲の良かった子が、打ち明けるようにして教えてくれた真実。そのときのことを思い出すたび、祥子の胸はずくずくと痛む。

笑わないほうがいいよと、注意してくれた友達は、祥子のためを思って言ってくれたのだろう。だけど……その真実は、祥子に生半可でないショックを与えた。

それ以来、彼女は笑みを浮かべるのをやめた。表情を変えないようにするのが一番楽だったから、無表情に徹した。娘が笑わなくなったことに両親は眉をひそめ、もっと笑うようにしろとたびたび注意してきたが、高校生くらいになると、無表情の祥子に慣れてしまったらしく、小言を言われることもなくなった。

ほとんど表情を変えない祥子は、女の子たちから敬遠された。親しい友達もできず寂しくてならなかったが、気味悪がられるよりましと、自分を慰めた。

いまの会社に入社して二年目になるが、親しい友人なんて夢のまた夢……それどころか、ひどく嫌われてしまっている。

実際陰口を耳にしてしまったこともある。笑みを浮かべない祥子は、はたから見ると、とっつきにくく、ひどく怖いようなのだ。

それでも……気味悪がられるよりは……マシ……よね？

ありがたいことに、男性社員たちのほうは、不思議と彼女に話しかけてくれる。彼らは、祥子が笑おうが笑うまいが、別に構わないらしかった。この無表情も怖くないらしい。たぶん、亮介と滝野のおかげだ。彼らが祥子を普通に受け入れてくれているのを見ているから、あまり怖がらずに話しかけてくれるのだろう。

女の子の友達を持つことはもう諦めているが、それでもやっぱり憧れを捨てられずにいた。女子社員の中で浮いた存在になり、敬遠されて完全に孤立してしまっているとしても……

食事は美味しかった。和食に難色を示していた滝野も、楽しそうに話しながら豪快に食べている。

「滝野、少しは静かに食べられないのか？　周りに迷惑だぞ」
「えーっ、俺、迷惑になるほど騒いでないっすよ」
「騒いでない？　機関銃みたいに言葉を連射してるやつが、よく言う」
亮介と滝野の愉快なやりとりを眺めながら、祥子は小さく微笑んだ。
その瞬間、亮介が祥子のほうを向いたので、彼女は反射的に笑みを消す。
亮介が、やわらかに微笑みかけてきた。
その笑みにハートを射抜かれ、祥子の息が止まる。
亮介はもっと自分を知るべきだと思う。彼は自分がどんなに破壊的な笑みを浮かべているか、まるでわかっていない。彼は、笑顔が作れない祥子とは真逆で、どんな女性のハートもとろけさせるような魅力的な笑みを浮かべる。
笑顔に強烈なコンプレックスを持っているせいで、祥子は魅力的な笑顔の持ち主である亮介に、どうしようもなく惹かれてしまうのかもしれない。

「石見主任、送ってくださってありがとうございます」
アパートの前で祥子はお辞儀した。
「なんのなんの、気にすんなよ、本川」
亮介の車の助手席に座っている滝野が、大きな顔をして手を振ってくる。

「僕に言ってるのに、なんでお前が応える」
運転席の亮介が、滝野を睨みつけて文句を言う。亮介の言うとおりだと祥子も思うが、滝野は全然気にしていない。
ほんと、滝野さんってば、困った人だ。
車で出勤しているのは、亮介だけだ。滝野は車を持っていないし、祥子は免許さえも持っていない。三人で食事に行くとなると、当然のように亮介に乗せてもらうことになる。祥子は、食事のたびに家まで送ってもらうことを申し訳なく思っているのだが、滝野は、これっぽっちも気にしていないらしい。
「本川君、寒いから早く家に入れ。風邪をひくぞ」
確かに、二月に入ったところで、外はひどく冷え込んでいる。けれど、亮介のやさしい心づかいに、寒さも吹っ飛ぶ。
その場では、「はい」と答えた祥子だが、結局、亮介の車が見えなくなるまで見送った。彼の車が見えなくなった途端、寒さが身に染みてくる。祥子は急いで部屋に入った。
亮介と過ごせて、今日もしあわせだった。食事も美味しかったし……
一人暮らしのアパートで、ひとり黙々とご飯を食べるのは寂しい。本当は、毎日、亮介のやさしい笑みを眺めながら食事をしたい。でも、そんな考えは贅沢すぎる。会社の女の子たちは、一度でいいから亮介と一緒に食事をしたいと願っているのだから。

彼の微笑みに魅力を感じているのは、祥子だけではない。その証拠に、昨年のバレンタインデーに亮介が受け取ったチョコの数は、三十を超えていた。どのチョコを誰から受け取ったか、書き留めたのは祥子だったのだから、忘れようもない。

たぶん、今年もその役目が回ってくるんだろう。

「はーっ」

思わず大きなため息を漏らすと、祥子は肩を落として淡い桃色のソファに座り込んだ。このソファはついこの間購入した、いまの祥子のお気に入りだ。彼女は可愛いものが大好きなのだ。会社の女子社員が知ったら似合わないと笑うかもしれないけれど……。もしかしたら亮介も祥子に可愛いものは似合わないと思うかもしれない。祥子は再び深いため息を漏らした。

お風呂に入って温まった祥子は、急いでベッドに潜り込んだ。

「石見主任、おやすみなさい」

暗い空間に向けてそっと呟く。すでに習慣となっている挨拶だ。

目を閉じれば、優しく微笑んでいる亮介が容易に浮かぶ。

石見主任に、この先もずーっと、恋人ができなければいいのに……

もし彼に恋人ができたら、もし結婚してしまったら……

その考えに、身が震えた。

そしたらもう、苦しすぎて、彼の側にいられなくなる。

でも、仕事を辞めるなんてことは、そう簡単にできない。この先もずっと、彼女はひとりきりで生きていかなければならないのだ。

働かなければ生きていけない。いま会社を辞めても、新しい仕事なんてそう簡単に見つかりはしないだろう。

そのときは……他の部署に異動願いを出そうか？

柿沼恭弘（かきぬまやすひろ）のことが、頭に思い浮かんだ。柿沼は亮介と同期。彼もまた他の部署の主任をしている。彼は祥子の仕事ぶりを認めてくれているらしく、自分の部署にこないかとしきりに誘ってくる。もちろん、いまはそんなつもり、さらさらないが……

もし、亮介が結婚……いや、恋人ができたら……柿沼に頼めば、彼の部署に異動させてもらえるかもしれない。

未来への不安が、ほんの少しだけ和らいだ。そんな未来など来なければいいと思うけど、一生、亮介が結婚しないなんてことはないだろう。いずれ、彼は誰かと付き合い、そして結婚……

胸がつぶれそうに痛み、祥子は思考をストップさせた。

やめよう……わざわざこんな辛いことを考えて苦しがるなんて……不毛だ。

祥子の頬に涙が零れ落ちた。
彼女は、指先で涙に触れ、馬鹿な自分を笑った。

2　引っ越しの目的　～亮介～

「石見主任、お疲れさんでした。また明日っす」
助手席から降りた滝野は、夜中だというのに大声を出す。
まったく、こいつほど神経が図太いやつは、そうそういまい。
「少しは声を抑えろ。近所迷惑だぞ」
「えーっ、俺、そんな大声出してないしぃ」
心外とばかりにむくれて言い返してくる滝野に、亮介は心が折れた。
こいつには、何を言っても無駄だ。
「それじゃな」
「はーい。主任、気をつけて」
無邪気に大きく手を振られ、亮介は半笑いで手を振り返すと、すぐに車を出した。
確かに滝野に難点はあるが、それでも充分亮介の役に立ってくれているのだ。不本意

だが、奴には感謝すべきだろう。滝野がいるからこそ、祥子を自然に誘えるのだし、彼女も気軽に誘いに応じてくれるのだ。
運転しつつ、亮介は笑みを浮かべた。
今日も祥子は美しかった。
自分は特別面食いというわけではないつもりだが……彼女の顔を目にすると、亮介は思わず見入ってしまいそうになる。あんな顔が自分の好みだったのだなと、いまさら思う。
二年前、入社してきた祥子を初めて見た日から、亮介の心は彼女に囚われている。祥子が自分の部署に配属されたと知った瞬間など、危うく跳び上がりそうになったほどだ。
感情のこもらない独特の話し方と、クールな性格。整った目鼻立ち。目を引くほど長いまつげ。引き締まったウエストに、すらりと伸びた脚。ほどよくふくらんだ胸。
何もかもが亮介を虜にする。
もちろん亮介は、祥子との距離を詰めたい。だが……彼女の反応を見るに、祥子が彼に対して上司以上の気持ちを持っているとは思えなかった。
この二年、なんの策も取らなかったわけではない。さりげないアプローチを何度もしてきた。
だが……まるで効果はなかった。
彼女への好意を伝えようと微笑んで見せたときは、あからさまに引いていたし、ワザ

と勢いよくぶつかって、抱き締めたときも、哀しいほど華麗にスルーされた。
それでも、嫌われていないとは思う。少なくとも、嫌悪されてはいない……はず。
彼のことを嫌いなら、いくら上司の誘いだからって、こう頻繁に一緒に食事をしてくれたりしないだろう。
頭の中に滝野の顔がひょいっと浮かび、亮介は顔を歪(ゆが)めた。
まさか、あの厚顔無恥な滝野を好きなんてことは……ないよな?
絶対にありえてほしくない想像を、亮介は切って捨てた。あんな奴に男として負けるなんて、プライドが崩壊する。
むっとした顔で運転している自分に気づき、亮介は気を取り直そうと、深呼吸した。
注意すべきは滝野などではない。亮介と同期の柿沼。奴のほうだ。
柿沼は祥子に好意を持っているようだ。たぶん、亮介同様に、彼女が入社してきたときから。
ことあるごとに柿沼は祥子の仕事ぶりを褒めるし、自分の部署に来ないかと繰り返し彼女を誘っているらしい。
頭がよく、仕事もできて、見た目もいい。いささか変人ではあるが、そういうおかしなところが不思議とひとを引きつける。それが柿沼という男だった。

車をマンションの駐車場に止め、自分の部屋に向かっているところで携帯が鳴った。
相手を確認し、携帯を耳に当てる。
「亮介、いまどこにいる?」
きりっとした声の主は、松田修治(まつだしゅうじ)。亮介の高校時代からの親友で、従妹(いとこ)のめぐみの夫でもある。
「うん?　ああ、なんだ来てたのか?」
亮介の部屋の前で携帯を耳に当てている修治の姿が見えた。
「修治、こっちだ。いま行く」
こちらに振り返り、亮介の姿を確認したらしく、修治が手を上げてきた。
「いま来たところか?」
亮介は駆け寄ると、玄関の鍵を開けながら尋ねた。
「ああ。いいタイミングだったみたいだな」
家に入って何より先に暖房を入れると、亮介は飲み物を用意するために、キッチンに入った。修治は居間のソファの、互いの顔が見える位置に腰かけ、すぐに話を切り出してきた。
「頼まれてた物件だが、思ったより早く完成した」
「本当か?」

笑みを浮かべた亮介は、勇(いさ)んで聞き返した。
「ああ、入居開始が二週間早まった。亮介、どうする?」
「もちろん、すぐに引っ越すさ」
コーヒーを淹(い)れながら、機嫌よく答えた。
修治は不動産屋で、亮介は彼に新しい住まいを探してもらったのだ。
別に、いま住んでいるこの部屋に文句があるわけではなかった。彼が引っ越す目的は、ただひとつ。それは、祥子のご近所さんになること。
亮介の希望にぴったりの物件はすぐに見つかったものの、そのときはまだ建築途中だった。半年以上待たなければならないと知り、別の物件も探してもらったが、祥子のアパートに近いところには他にいい物件がなかった。どうせ引っ越すのなら新築のマンションのほうが居心地もいいし、仕方なく完成を待つことにしたのだ。
「ほんとに最上階で良かったのか?」
「いいさ。高みで暮らすという経験も悪くない」
あの高さからなら、祥子の住むアパートも見えるかもしれない。もちろん、彼女の生活を覗こうなどと不埒(ふらち)なことは考えていないが。
「ここも悪くないと思うんだが……」
コーヒーカップを受け取りながら、修治が言う。

「それにしても、片付いてるよな。この部屋が男のひとり所帯だなんて、誰も思わないぞ」
まるでけなすように言う。亮介は声に出して笑った。
「掃除は苦にならないんでな」
「おかしなやつだよな、お前って。料理はそこいらのレストランよりうまいときてるし……」
そう言った修治は、愉快そうに笑い出した。
「めぐみのやつ、お前が越してくるのを手ぐすね引いて待ってるぞ。ほんとに、あそこで良かったのか?」
従妹のめぐみはまるで遠慮のないやつで、亮介のところにやってきては、ご飯を食べさせろと横柄に言う。さらには自分の家の夕食まで作らせたり、ケーキを作らせたり……
今度引っ越す先に難点があるとすれば、それは修治たちの家が、ここよりもかなり近くなるということ。めぐみには悩まされることになるだろう。だが、祥子を手に入れる可能性が増すのなら、甘んじて受け入れるつもりだ。
「まあ、お前が近くに住むようになれば、ちょくちょく酒も飲めるだろうし、俺は大歓迎だけどな。しかし、うまいな。このコーヒー」
「そうか」
亮介は自分もコーヒーを口にしながら、近づきつつある引っ越しの手順について考え

込んだ。

3　花丸でしあわせ　～祥子～

「ねぇ、もう用意した？」
「用意って……ああ、チョコのこと？」
　チョコという単語に思わず反応し、祥子は着替えの手を止めた。
　仕事が終わり、更衣室は賑やかな会話で溢れている。彼女の背後で会話しているのは、三人の後輩たちだ。
「決まってるじゃん。もう来週だもんね。あちこちの特設売り場を見て回ったんだけど、この間オープンしたばっかのショッピングモール、あそこが一番だったよ」
「ああ、わたしもあそこに行こうと思ってたんだ」
「ならさ、一緒に行かない？」
「えーっ、わたしたちライバルなのにぃ」
「ライバルねぇ……」
　そう言った後輩は、「あんたさぁ」と、ぐっと声を潜めた。

「本気で石見主任にチョコを渡す気なの？」
「べ、別にいいでしょ」
「聞いたじゃん、先輩から。石見主任は、本気のチョコは受け取らないって」
　周囲の騒がしさにかき消されてその言葉は周囲の女子社員たちには届かなかったようだが、三人のすぐ後ろに立っている祥子には筒抜けだった。話の内容が亮介のことだったから、聞くまいとしても耳に入ってしまうのかもしれない。
「あんなの本当かわかんないもん。ライバルを減らそうっていう、先輩たちの策略じゃないかと思うんだよね」
「策略ねぇ……けど、まあ、あんたじゃさ……」
「そうそう、遠目に憧れるだけにしといたほうがいいって」
「えーっ、あんたら、それひどくない？」
　むっとしたような声のあとに笑い声が上がった。その後も、きゃいきゃい言いながらの会話が続く。
　三人の楽しげな様子を羨ましく思いながら、祥子は知らずため息をついていた。
　亮介は、この社の女子社員の憧れの的だ。そんなひとを相手に、自分が恋心を抱いているなんて、滑稽かもしれない。それでも……好きなものは好きなのだ。好きな気持ちはどんなにあがいたって捨てられないし、彼の側にいることで、さらに好きという気持

ちが膨らんでいくのも止められない。
突然、背中にドンという衝撃を食らい、祥子はよろめいた。
「わわっ！」
驚いて振り向くと、楽しそうに会話をしていた後輩たちが、恐れおののくように祥子を見ている。
「も、本川先輩……す、すみませんでした」
このくらいのこと、別にどうということもない。
「いいえ」
なんとも思っていないということを伝えるためにそれだけ言って顔を前に戻すと、祥子は着替えを再開した。
「ほ、ほ、本当にすみませんでしたっ」
怯えきった声に祥子は驚き、思わずまた振り返ってしまう。
目が合った途端、後輩は「ひっ」と悲鳴を上げ、恐怖に顔を引きつらせた。
「別に……何も気にしていないわ」
祥子は自分の気持ちを正しく伝えようと口にした。だが、それすら事態を悪化させただけのようだ。
先ほどまでの賑やかな声は途絶え、更衣室の中は、いまや凍りついたように静まり返

っている。
またやってしまったようだ。自分のせいで……またみんなに嫌な思いをさせてしまった。
そんなつもりなど、まったくないのに……
泣きそうになった祥子は、ぐっと涙を堪えた。
先に着替えを終えた三人の後輩たちは、逃げるように出ていった。彼女たちがいなくなっても、部屋の空気は元に戻らず、気まずさに押しつぶされそうになりながら着替えを急ぐと、祥子も更衣室から出た。
ドアが閉じた途端、更衣室の中がざわめく。
「ひゃーっ、相変わらず怖いわ、クールビューティ本川。更衣室の中が、北極になったかと思った。この鳥肌見てよ」
楽しげに嘲る声が聞こえた。ドアの外に声が漏れることなど気にしていないらしく、辛辣なコメントはまだ続く。
「ほんと、うっざいよね。男にばっかり取り入っちゃって。あんな女の敵、さっさと辞めちゃえばいいのに」
彼女は耳を塞ぐようにして、その場から去った。

「あら、本川さん」
廊下を急いでいた祥子は、急に呼び止められ仕方なく立ち止まった。
他部署の先輩が三人、立ち話をしていたようだ。
「なんでしょうか？」
声をかけてきた先輩は、祥子をじろじろ見てくる。
「ねぇ、あんたさ。また石見さんにくっついてるつもりなわけ？」
くっついて？
確かに、仕事で補助をしているので、仕事中は彼の側にいるし、昼食も滝野も加えた三人で食べるのが日課になっているから、くっついていると言われればそうだろう……
「そんなに邪魔したいわけ？」
「邪魔……ですか？」
意味がわからず、祥子は問い返した。
「邪魔に決まってるじゃない。チョコレートを渡そうっていうときに、あんたがぴったりくっついていたんじゃ、せっかくのイベントも台無しってことよ」
バレンタインデーのことを言われているのだと、ようやく気づいた。
「そうでしたか……すみません」
ですが、と続けたいところだったが、祥子は口を閉ざした。

反論しても、いい結果は生まれないだろう。
確かに昨年のバレンタインデー、祥子は亮介にくっついて歩き、彼に頼まれた仕事をした。受け取ったチョコの管理とくれた相手のチェックを頼まれたのだ。もちろん仕事ではないが、そこは上司の頼みだし、言われるまま引き受けたのだが……
女子社員たちには、良く思われていなかったらしい。
よくよく考えてみれば、確かに先輩の言葉も頷ける。もし祥子が亮介にチョコを渡そうとして、彼の側で名前をチェックしている女性がいたら、心が萎える。
「ほんと、あんたって最低な女よね。女心なんてまるでわかってないし」
「あんたたち、わたしに言わせりゃ、この本川に女心を期待するほうがおかしいっての。もとから感情がないのよ、感情が。なーにがクールビューティ本川よ。笑わせるわ」
「男には人気あるもんねぇ。この無表情がたまんないんだってさ」
「男をはべらせて女王様気分か。さぞかし気持ちがいいんでしょうねぇ」
祥子が俯いた、そのときだった。
「本川先輩っ！　こんなところにいらっしゃったんですかっ！」
急に大声が聞こえ、祥子は後ろを振り返った。
声をかけてきたのは、顔と名前は知っているものの、親しいと言うほどではない後輩だ。彼女は小走りで駆け寄ってきて、祥子の手首を掴むと、「早く来てくれないと困り

ますよぉ。さあ、こっち、こっち」と叫びながら、駆け出す。腕を引っ張られた祥子は、呆気に取られたまま一緒に走った。

角を曲がり、他の部署に連れ込まれる。

「おーっし、園島、よくやった」

そこにいたのは柿沼だった。そして、祥子を引っ張ってきたのは、柿沼の部下である園島都美子。

「あ、あの……柿沼主任、何か御用でしょうか？」

戸惑いながら問いかけた途端、柿沼がずっこける真似をした。隣の園島も付き合うようにずっこけるふりをする。

「君がこわーい先輩に捕まって、のっぴきならない窮地に陥っていたようだったから、助けを差し向けたんだが」

「えっ？」

助けてくれたのか？　ふたりして？

喜びよりも、驚きのほうが大きかった。園島は頬を染め、達成感に満ちた笑みを浮かべている。

「もおっ、勇気ふりしぼりましたよ。あの先輩たち、怖すぎなんですもん。まだ足が震えてます。柿沼主任から、行ってこいって命じられて、生きた心地がしませんでした」

「よく言う。俺が言う前から、助けたがってたじゃないか？」

「そ、それは……だって、見てられませんよ」

「正義感バリバリだもんな、園島」

「みんな一緒ですよ」

「そうかぁ？　そうは思えないけどな」

「あ、あの……気を使っていただきまして、ありがとうございます」

祥子はふたりに向けて頭を下げた。

助けてもらえるなんて……それも、同性の園島に……それが何より嬉しかった。

「本川先輩、やっかまれてるんですよ。あの素敵すぎる石見主任の側にいられるから」

「素敵すぎ……か？」

「いま、鼻で笑いましたね？」

園島は柿沼の言葉にむきになって言い返す。

「そこで睨むな」

「別に睨んでなんか……」

顔を赤らめて拗ねている園島を、祥子は憧れの目で見つめた。

本当に、可愛いひとだ。長いまつげはくるんとカールし、大きな目が愛らしい。感情のままにくるくると変わる表情、そしてチャーミングな笑顔。祥子がこうありたいと願

う女性像だ。あまりに完璧で嫉妬する気にもならない。
祥子の部署の男性社員の中にも、彼女に好意を寄せている者は多い。
「それで？　本川君、そろそろ部署異動する気になってないか？」
「なるわけないですよ。あんな素敵な上司の下で働けてるのに、柿沼主任みたいな、部下をこき使うひとのいる職場になんて……」
「こいつ、言ったな」
「真実ですからね。いくらでも言いますよっ」
柿沼と園島ときたら、掴み合い、揉み合いながら互いをけなし始めた。
ふたりの愉快すぎるやりとりに、祥子は無意識にくっと笑った。
掴み合っていたふたりが、音を立てる勢いで振り返る。ぎょっとした祥子は、笑いを引っ込めてふたりと見つめ合った。
「見たか？」
「み、見ました……」
それは囁くようなやりとりで、祥子には聞こえなかった。
「あの……？　どうかしました？」
自分が笑ったことに気づかない祥子は、いつもの無表情でふたりに問いかけたのだった。

自分のアパートの部屋で夕食を終えた祥子は、箸を置いてため息をついた。
今日は色々あった。更衣室での出来事。そして廊下で先輩たちに言われた言葉……。言葉はきつかったが、ああ言われても仕方がないと思う。だから、恨む気持ちも湧かない。
それでも、あの場から救い出してくれた園島と、その指示を出してくれた柿沼には感謝とともに、嬉しさが込み上げる。
特に、同性の園島。あれほど好意的に接してくれた女性など、これまでひとりもいなかった。
あのあと柿沼に誘われ、祥子たち三人は喫茶店でお茶をした。
園島と友達になれたなどと、おこがましいことは思っていないが、それでもただの先輩後輩という間柄よりは親しくなれたのではないだろうか？
バレンタインデーか……
先輩たちの言葉で、昨年の祥子の行動は、亮介に憧れている女子社員たちに嫌な思いをさせてしまっていたことがわかった。今年は、頼まれたとしても、断らないと。あの役目は、滝野にしてもらえばいい。だいたい今年は、チョコを渡す彼女たちに、祥子も交ざるつもりでいるのだ。
今年は、絶対にチョコを手渡す。そして、キャンディーボックスを手に入れるのだ。

「そう、キャンディーボックス……」
無意識のうちにその言葉が唇から零れ出たことに、祥子は苦笑いした。
昨年、祥子は亮介にチョコを用意しなかった。バレンタインデーという行事そのものに、当日になるまで気づかなかったのだ。
山ほどのチョコを受け取っている亮介を、どんな気持ちで見守ったか……
ただ、亮介は、チョコを差し出す全員に、「これは義理だね？」と問いかけ、そうだという答えをもらってからしか受け取らなかった。
どう見ても、本命としか思えないチョコを差し出している子たちも、あの魅力的な笑みで問いかけられ、顔を強張らせながらも「そうです」と答えていた。
亮介に恋人ができなかったことにほっとしたが、ひと月後のホワイトデー、祥子は泣くほど後悔する羽目になった。
その日、亮介は大きな紙袋をふたつ提げて出社してきた。その中には、なんとバレンタインデーにチョコをくれた子たちに渡す、キャンディーボックスが詰まっていたのだ。もちろん、亮介にチョコをあげなかった祥子に、そのキャンディーボックスをもらう権利はない。なのに祥子は、キャンディーボックスを配りに行く亮介に、付き添わねばならなかったのだ。
嬉々としてキャンディーボックスを受け取る女の子たちを眺める苦行。

それから数日、祥子はがっかりしすぎて魂が抜けたようになった。
だが、今年は違う！
祥子はぐっと手を握りしめ、心の中で宣言した。
絶対にチョコを渡し、キャンディーボックスをゲットするのだ。
祥子は勢いのまま立ち上がり、壁に貼ったカレンダーに歩み寄った。そして、十四日に付けた、赤い大きな丸を凝視する。
もうすぐだ！
覚悟を胸に秘めて、ひとり頷く。
今度の週末にはチョコを買いにいかなければ。
亮介だけにチョコを渡すわけには行かないから、滝野にもあげるとしよう。
祥子は眉を寄せて考え込んだ。
滝野にあげるとなると……やはり同じ部署の人たちにも、あげないわけにはいかないだろうか？　最大、何人くらい欲しがるだろう？　せいぜい五人くらいかしら？
滝野は、昨年もチョコをくれないのかと言ってきたから、今年も欲しがってくれると思うのだが……
そしたら、滝野さんに感謝チョコという名目で渡し、ついでの感じで、石見主任にもどうぞと渡せばいいわよね？

なんだか思ったよりも、簡単にいきそうだ。
祥子は自分でも気づかないうちに、大きな笑みを浮かべ、カレンダーをめくった。
三月十四日にもすでに赤い丸がつけてある。祥子は足取り軽く、赤いペンを取ってくると、その赤い丸を花丸にした。
カレンダーの中央の花丸を見つめた祥子の顔は、しあわせ色に光り輝いていた。

4　まずは催促　～亮介～

「ふぅっ」
亮介は大きく息を吐くと、ほっとしつつ周りを見回した。
部屋の中は、いかにも引っ越し直前といった様相を呈している。
新しいマンションへの引っ越しは明日へと迫った。ずっと引っ越しの準備に追われて過ごしていたが、ようやく明日で終わる。すべて業者に任せてしまえば簡単だったのだが……
この際だし、必要ないものはすべて処分してしまいたかった。それに、気分を一新するために、家具も、すべてではないが、新しい住居に馴染むものに買い替えることにした。

しかし、自分ひとりが住んでいただけなのに、あれこれと物が増えているのには驚いた。
引っ越し先で、また荷物の片付けをすると思うとうんざりするが……そちらはそう慌てることもない。ゆっくりやればいいだろう。
近所に、亮介が越してきたとわかったら、彼女はどう感じるだろう？
いつもと同じ、無表情な祥子の顔が脳裏に浮かぶ。
嬉しそうにはにかんでいる顔を、なんとか想像してみようとしたが、無理だった。
これは自分の想像力が乏しいせいなのか？
それでも、ほんのりと微笑んでいる顔は思い浮かべられる。この二年の間に、幾度か目にしたことがあるのだ。
それは、いつもほんの一瞬だった。顔を逸らす瞬間、祥子はふわりと微笑むことがあるのだ。たぶん、本人が意識しないときだけ現れる笑み。
まったく不思議な子だ。
無表情だから冷たく見えるが、言葉を交わせば、驚くほどの純粋さに触れられる。
けれど、内面には踏み込めない。それは彼女との間に壁を感じるからじゃない。ただ、彼女が戸惑うからだ。あの戸惑いが、こちらの動きを止める。
なんなんだろうな、あれは？
ともかく、彼女の家の近くに引っ越せば、仕事以外でも親しくなれるチャンスが格段

に増えるだろう。三人で夕食を食べた帰りも、今度は滝野が先、彼女を後で送れることになる。無条件でふたりきりになれるのだ。それだけでも引っ越す意味がある。

建設中のマンションには何度か足を運んだが、祥子のアパートのほうには行っていない。彼女と親しくなりたいという理由で引っ越すことが、バツが悪いのだ。

こんなことでは、近くに引っ越したことを、なかなか告げられないかもしれないな。

亮介は顔をしかめた。

でも、告げないことには、送る順番も変えられないし……

ぐだぐだと悩んでばかりいる自分に嫌気がさし、亮介は立ち上がった。

もう夜もかなり更けている。さっさと寝たほうがいい。

寝室に入り、ベッドに潜り込む。このシングルベッドも今夜限りだ。引っ越し先の部屋はかなり広いので、セミダブルのベッドを思い出し、身じろぎした。

亮介は、自分が選んだベッドを購入した。

健康な男の身体を持つ身だ。祥子を求める気持ちは、膨らんでいくばかり。

手に入れたい……なんとしても……

翌日は快晴だった。

引っ越し荷物は手馴れた男たちの手で神業のように素早くトラックに積み込まれ、一

時間後には真新しいマンションの十階にある部屋に運び込まれていた。

「驚くばかりだな。あっという間に終わった感じだ」

亮介は笑いながら、引っ越しを手伝ってくれている修治に言った。

「何言ってる。これからが本番だぞ」

「まあな」

家具は配置されているものの、どの部屋も雑然としている。

「まずは、キッチンと居間だけ綺麗にするさ。あとは、ぼちぼちやる」

「お前のことだから、五年経っても引っ越しした日のまま、段ボールがあるなんてことはなさそうだな」

「は？　五年もそのままだなんて……そんな奴いるのか？」

「いるいる。人間色々だぞ」

愉快そうに言った修治は、急に周囲をきょろきょろと見回した。

「どうかしたのか？」

「いや、ほら、連中はどうしたんだ？」

連中と言われただけで、すぐに誰のことを言っているのかわかった。そして、わかってしまった自分になんだかむしゃくしゃする。

連中というのは、亮介の大学の後輩である中本哲郎（なかもとてつろう）と、蓑田昇（みのだのぼる）のことだ。滝野に似た

タイプで騒がしい上に、世話も焼ける。
ふたりとも大学院に進み、いまだ学生の身分。金に困りがちな生活をしているため、食べるものに事欠くと、ふたりして亮介のところにやってくる。なぜか、必ずふたり一緒なのだ。彼らがひとりで来ることはまずない。さらに、なんの連絡もなく突然やってくる。おかげで自分のぶんの食事をふたりに取られ、当の亮介は、なんにも食べられなかったなんて、許しがたいことすらあった。
さんざん振り回され、疲れさせられ、どうしてこいつらの世話を自分が焼かなきゃならないんだと、虚しさに囚われる。
「あいつらには引っ越しのこと、知らせてないんだ」
顔を歪めて言う亮介に修治は吹き出し、声を上げて笑い出した。
「どのみち、ばれるのに」
そんなことはわかっている。見つからないように身を潜めていようと考えているわけでもない。気のいい奴らだし、慕ってくれるのは嬉しいのだが……
「ばれるのは、遅ければ遅いほどいい」
「気持ちはわからないでもないが……来ないと来ないで寂しいもんだぞ」
亮介はぷっと吹き出した。
「そうなんだろうな」

世話が焼ければ焼けるほど、いなくなれば寂しいだろう。それでも……当分は顔を見なくてもいい。
「そういや……めぐみ、遅いな」
妻の名を口にし、修治が腹に手を当てる。
めぐみはいま、食料品の買い出しに行っている。縁起物だし、引っ越し蕎麦を食べようと言い出し、自ら買い物に出かけた。もちろん、蕎麦を作るのは亮介だが……
「そろそろ帰るだろう。お湯、沸かしとくかな」
亮介は立ち上がり、キッチンに入った。修治も移動してきて、キッチンの中で動き回る亮介を、カウンター越しに見ている。
「なあ、亮介」
「うん？」
足元の段ボールから皿を取り出し、食器棚に詰め込みながら返事をする。
「この引っ越し、なんか理由があるんだろ？」
その問いにどきりとし、思わず手が止まった。
「ずいぶんと焦ってるようだったから、最初はストーカーにでも悩まされてるのかと思ったりもしたんだが、半年待つことにしたところを見ると、そんな緊急性があるわけでもなかったようだし……」

どうやら、修治は亮介から答えがもらえるとは思っていないらしい。ひとりでぶつぶつ言っている。

好きな女との仲を進展させたくて、彼女の家の近所に越してきたなんて知ったら……腹を抱えて笑うんだろう。

ヘタに知られたら、笑われるだけでなく、余計なお節介をされそうだ。めぐみは言うに及ばず……

ふたりに知られないように気をつけないとな。

「ああん、もう、亮ちゃんの作ったものは最高だね！」

蕎麦を完食しためぐみは、満足そうに叫び、お腹を撫でまわす。てんぷらを揚げてトッピングを豪華にしたから、蕎麦だけで充分お腹いっぱいになったようだ。修治もうまそうに食べてくれている。

亮介はそんなふたりに目を細めた。これだけうまそうに食べてくれると、作り甲斐がある。

「そうそう、実はね、スーパーですっごく素敵な夫婦を見ちゃったよ」

「素敵な夫婦？」

「うん。年齢はわたしと修ちゃんくらいでさ、奥さんのほうは白い杖を持ってた」

「へーっ」

「なんかすっごいしあわせそうでね。奥さんの笑顔が最高なの。ほんで、旦那さんもかっこよくてさ……奥さんのこと、うっまいことカバーしてるんだ」

「お前、そのふたりを眺めてて、帰ってくるのが遅くなったんだな」

修治の指摘は図星だったらしく、めぐみはにははと笑う。

「しあわせとはいかなるものかを見たね。人生っていいなって思った」

めぐみと並んで座っている修治が、めぐみの頭のてっぺんをぽんぽんと叩いた。

めぐみは、修治に笑いかけ、きゅっと肩をすぼめて見せる。そのめぐみの目は、涙で潤んでいた。

そんなふたりに、亮介は強烈な羨ましさを感じた。思いを共有できる存在が側にいる。どんなにか心が満たされるだろう。

「さて、亮ちゃん。来週はいよいよバレンタインデーじゃない。今年もおおいに期待してるわよぉ」

涙をなんとかひっこめられたらしいめぐみは、目を潤ませたことを誤魔化そうとするように元気に言う。

バレンタインデーという言葉に、亮介は顔をしかめた。思い出したくもないのに……

正直、亮介は、バレンタインデーなど消えてなくなればいいと思っている。

チョコをくれる子の好意は嬉しいし、ありがたく受け取るべきだとは思うのだが……本音を言えば、受け取りたくない。

過去の出来事が思い出され、亮介は暗い気分に陥った。

三年前のバレンタインデー。あの年も、たくさんのチョコをもらった。チョコだけのものが多い中、チョコ以外にプレゼントがついているものもいくつかあった。プレゼントの中にはかなり高額のものもあり、亮介はブランド物のネクタイと名刺入れをくれたふたりの子に、もらったものに見合った品を返した。それが礼儀だと思ったのだ。だが、それが窮地を招いた。

高価なお返しをもらったふたりがふたりとも、亮介は自分の告白に応じてくれたと思い込んだのだ。会社から帰ろうとする亮介のところに、ふたりは一緒に来て、彼を責め立てた。もちろんそんな気持ちなどなかった亮介は、正直なところを告げた。

そのあと彼は、かなり長いことふたりから憎まれ続けることになった。いまは、ふたりとも寿退社していなくなったが……

あんなことにならないように、いまの彼は、チョコ以外はけっして受け取らないし、必ず「義理だね」と確認するようにしている。

義理ではないと口にする子からは、もちろん受け取らない。

そのときもらったブランド物のネクタイと名刺入れは、手にしているのも嫌ですぐさま処分したけれど、気持ちの上で尾を引いていて、そのどちらのブランド製品もいまだに買う気にならなかった。

「亮ちゃん？　ちょっとぉ、話、聞いてる？」

「あ……ああ、聞いてる」

「いい、あいつらに、いいのを全部持っていかれないように、気をつけてよ」

そう言っためぐみは、「あれっ？」と言い、周囲をきょときょとと見回す。

「そういえば、あいつら、来てないの？　絶対、お昼を狙ってくるもんだと思ったのに」

その言葉を聞いて、亮介は苦笑した。

めぐみの言うあいつらとは、もちろん中本と蓑田のことだ。

「そうか、それでか。買ってきた蕎麦の量が多いと思った」

「だって、亮ちゃんのイベント事に、来ないやつらじゃないもん」

めぐみは腑に落ちないというように、首を捻りながら言う。亮介は、修治と目を合わせて笑った。

「知らせてないんだってさ。ワザとな」

「へっ？　ああ、そうなんだ」

夫の言葉に、めぐみの顔がパッと華やぐ。

「そうだ、この際さ、あいつらに亮介を探し回らせて楽しもうよ」

「お前な、趣味悪……いや、性格悪いぞ」
夫の軽い咎めにも、めぐみはへっちゃらでにやにや笑っている。
「いいのいいの。あいつらはそんくらいやったって、どうってことないって」
「亮介、いいのか？」
修治が苦笑しながら聞いてくる。亮介はどう答えるか決めかね、苦笑いを返した。
「そいじゃ、今年のチョコは、このわたしが全部もらいだね」
腰に手を当て、めぐみはにっしっしと笑う。
「おいおい、お前ときたら、まったくごうつくばりだな」
「どうせ亮ちゃんは食べないもん。もらってあげなきゃ、チョコが可哀想だよ」
夫婦の会話を聞いていた亮介は、昨年のバレンタインデーのことを思い出した。
いつものように、昨年も大量のチョコをもらったが……きっともらえるだろうと思っていたチョコはもらえなかった。
あのときのショックを思い出し、亮介は肩を落とした。
本命チョコを期待したわけではない。義理で充分だった。他の子がくれるのと同じように、祥子からもらえれば嬉しかったのに……
救いは、彼女が誰にもあげなかったこと。
どうも、バレンタインデーに男にチョコをあげるという考えが、欠片もなかったらしい。

バレンタインデーなんてイベント、たぶん祥子にとって意味がないんだろう。
くれないのかと冗談混じりに催促したら、くれるだろうか？
くれるかもな……
明るい見通しに心が弾み、自然と口元がほころぶ。
「なーにー？　亮ちゃんったら、思い出し笑いなんてしちゃってぇ」
めぐみの指摘に、亮介は顔が赤らむのを感じた。
「あ、いや……」
「あいつらがあたふたしてる顔、想像してるんでしょう。ほーらね、修ちゃん。意地が悪いのはわたしだけじゃありませーん」
「意地が悪いとは言っていないぞ。俺は、性格が悪いと言ったんだ」
修治は真顔で答える。
「もおっ、修ちゃんってば、すぐそうやって、ひとの揚げ足取る」
めぐみは、唇を尖らせて夫をぽかぽか叩く。
「間違っていたから、訂正しただけ。揚げ足なんか取っちゃいない」
「まったく、あーいえば、こーいうんだから」
じゃれあうような夫婦喧嘩を、亮介は笑いながら見守った。
こんな風に心の通い合った相手を手に入れているふたりが、羨ましくてならなかった。

ふたりのように、祥子と心を通い合わせている未来を、自分は手に入れられるだろうか？

ともかく、まずは……

チョコの催促をしてみるとするか……

5　おかしな遭遇　～祥子～

うわーっ！

ベランダに出た祥子は、目に沁みるような青空に、心の中で歓声を上げた。

気持ちよく晴れたものだ。これならば、洗濯物も、干し甲斐があるというもの。

パンパンと音を立てて洗濯物を広げ、ハミングしながら干していく。ひとり暮らしだから、そんなにはない。洗濯かごの中に残っている最後の一枚を取り上げ、祥子は苦笑した。

男物のトランクスだ。二年ほど愛用している。

もちろん、彼女が穿（は）いているわけではない。母親から防犯のために洗濯物の中に混ぜて干せと命じられ、素直に従っているのだ。

確かに、防犯の役に立っている気がするし……

「それにしても、これも古くなっちゃったわね」

洗濯を繰り返してすっかり色落ちしてしまっている。

新しいのを買おうかしら……

けれど、男物の下着。独身の祥子には、なかなか難しい課題だ。これをレジに持っていくのは、かなり勇気がいる。

勇気を振り絞れたら、買ってくるとしよう。それよりも、今日はバレンタインデーのチョコだ。

どこのお店に買いに行こうか？

あの子たちが話していたショッピングモールに、ちょっと行ってみたくもあるけど……

彼女たちと鉢合わせしたら、いたたまれないし……会社のひとと会う可能性の低いお店がいい。

洗濯物を干し終えた祥子は、出かける支度をし、アパートを後にした。

最寄りの駅まで早足で歩いていた祥子は、引っ越しのトラックとすれ違った。もしかすると、近くに出来たマンションに向かっているのかもしれない。

建築中にかけられていた入居者募集の垂れ幕も目立っていたし、郵便ポストにもチラ

シが入れられていた。とても素敵なマンションだが、祥子の稼ぎで住めるような家賃ではない。

ああいうところは、新婚さんとか、子どものいる家族とかが住むところだろう。

祥子は、建物の向こうに見える、十階建てのマンションを見上げた。しばらくの間羨望の目を向けてから、再び駅へと歩き出した。

チョコが陳列された特設コーナーを前に、祥子はしばしそのまま立ち竦んだ。

バレンタインデーなど気にしたことがなかったから、この季節に、こんな風にチョコが売られていたとは、知らなかった。子ども向けみたいなものから、高級感のある大人用のチョコまで、多種多様だ。

考えてみれば、昨年のバレンタインデーに、亮介が受け取っていたチョコも、色々な形状をしていた。亮介はチョコだけしか受け取らなかったが、ここにあるチョコには、ハンカチやお酒などがセットになっているものもある。

こういうのが、本命チョコなんだろうか？　そのほかは義理チョコ？

亮介にチョコを差し出したら、きっと他の子と同様に、「義理だね？」と聞かれるのだろう。

その場面を想像してしまい、祥子はくすっと笑った。

「まあ」

小さな呟きが聞こえ、顔を上げる。目の前に、三十代くらいの女性がいた。祥子と目が合った途端、その女性は慌てたように視線を逸らす。

祥子は思わず目を瞑った。たぶん、このひとは祥子の笑った顔を見たのだ。

嫌な思いをさせてしまったことに、気まずさと申し訳なさを感じながら、祥子はそそくさとその場から離れた。

滝野たちに渡すチョコはすぐに決まったが、亮介へのチョコがなかなか決められない。亮介に、滝野たちと同じものは渡したくない。だが、中身が違うことが丸わかりでは駄目だ。外観はまったく同じに見えるものを選びたい。

眉を寄せ、真剣な顔でチョコを探していた祥子の目に、媚薬という強烈にインパクトのある文字が飛び込んできた。

ハート形のカードに手書きの文字で、『恋の媚薬。一粒食べれば、彼はあなたの虜だよん』と書いてある。

恋の媚薬？

祥子の手は、本人の知らぬ間に伸びていき、そのチョコを掴んでいた。

高級感溢れるラッピング。義理チョコではありえない値段。

このチョコを食べたら、石見主任はわたしの虜？

現実になるはずないけど……けど……

こ、これにしようかしら……

どうせ渡すなら……

両手でぐっと掴んだまま、腕に提げた売り場専用のカゴに目を落とし、滝野たちに渡すチョコを見つめる。

石見主任のをこれにするのなら、滝野さんたちのは、これじゃ駄目だ。主任にあげるものと同じに見えるのを選ばないと……

祥子は、滝野たちのチョコを亮介のチョコとまったく同じ箱の形のものに替え、包装紙とリボンを買い込んだ。

すでに綺麗にラッピングされているものを取り替えるのはもったいないが、同じものと思ってもらうためには、どうしても包み直さなければならない。

ほんとに、このチョコが媚薬ならいいのに……

『僕の目は……もう君しか映さない。祥子、愛しているよ』

頭の中で、亮介が囁く。

祥子は我を忘れて、相好を崩したまま、次の目的地である男性用下着売り場を目指した。

目的の場所が見えるところまでやってきたものの、祥子はそこで足が踏み出せなくな

った。

ぐっと一歩踏み出そうとするが、身体が進むのを拒む。売り場に誰もいなければなんとかなりそうな気がしたが、残念ながら客の姿がちらほら見えた。

だんだん買おうという気持ちが萎えてきた。

もうしばらく、あの使い古したトランクスを使い続ければいいし、電話で母に頼めば買っておいてくれるだろう。干しておけと、彼女に命じているのは母なのだし。月に一度は実家に帰っているし、そのときにもらってくればいい。

自分の考えに納得し、その場を立ち去ろうとした祥子だったが、ふと見ると、いつの間にか売り場にはひとっこひとりいなくなっていた。

レジのところには店員がいるが、何やらしゃがみ込んでごそごそやっている。

なんとなく、祥子のために神様が人払いしてくれたように感じた。このままこの場を去るのは、悪い気がする。

祥子は思い切って、男性用下着売り場に駆け込み、誰か来ないうちにと焦りながら売り場を物色した。安いものからブランド物の高いものまで様々だ。あんまり安いやつでは、すぐボロボロになりそうだし、一枚千円くらいのものの中から選ぶことにした。

目立つ色合いのものが、防犯には適しているだろうかと手に取ってみたものの、いつも同じ柄の下着がぶら下がっていては、防犯のために下げていると見破られてしまいそ

うだ。
無地のものにしようか？
グレーとか、黒とか、茶色とか……
祥子は目についた黒のトランクスを手に取った。
こういうの、石見主任には、穿いててほしいかも……
実際、亮介がどんな下着を穿いているかなんて知るわけがないし、この先、知ることもないが……
石見主任が派手な下着を穿いてたりしたら、ちょっと嫌かも……
先ほど手にした派手な柄のトランクスに視線を向ける。それを穿いている亮介が頭に浮かび、祥子の口角がゆっくりと上がっていった。
案外いいかも。可愛いかも。
そのとき、ポンッと後ろから肩を叩かれ、祥子は「きゃっ」と悲鳴を上げて跳び上がった。
慌てて後ろを振り返り、仰天する。
「か、柿沼主任」
どうしてこんなところに、このひとが？
「どうして、こんなところに、このひとが？　と、思ったでしょ」
思ったことをそのまま言い当てられ、ドギマギする。

立ち読みサンプルはここまで

いましがたの、乙女にあるまじき想像の余韻が残っているせいで、すさまじく気まずい。
「ところで～、それ、誰に買うの？」
その言葉に、自分が手にしているものに視線を当てた祥子は、動揺のあまりそれを放り投げた。
「おおっと」
柿沼は素早く手を出し、祥子が放り投げたトランクスを受け止めた。
「商品を投げちゃ駄目だな」
「す、すみません」
たしなめられ、祥子は慌てて頭を下げた。
「で？　これは誰の？」
改めて聞かれたが、柿沼に遭遇したショックでいまだ動揺が消えず、口を開けない。
「君のお父さん？　兄ってことはないよな」
左肘に手を添え、左手のひとさし指で顎を軽く叩きながら独り言のように言っていた柿沼の顔が、祥子に向いた。
「もしかしてぇ……」
にやつきながら、意味ありげな声を出す。
祥子は、柿沼が何を言い出すつもりかと、息を詰めて待った。